

連載寄稿

連載寄稿 中国・台湾訪問記 再来一杯茶《6》

中国・台湾訪問記 再来一杯茶 《6》 (お茶をもう一杯下さい)

※中国桂林の瀧江(りこう)下り

日本では「3大名産」とか「3大～」と3を使うが、中国では4である。多分中国では数字の3は英語のseveral (いくつか)と同じ意味があるので、「4大～」を使うのではないかと思う。中国での3は、例えば孔子の《三人行けば必ず我が師あり》の三人とは数人の意味で、また杜甫の漢詩・春望の《烽火三月に連なり》の三月とは数ヶ月の意味である。

さて中国の「古代4大美女」を知っているだろうか。人によって若干異なる場合もあるが概ね古い順から、西施(せいし)・王昭君(おうしょうくん)・虞美人(ぐびじん)・楊貴妃(ようきひ)の4人である。虞美人の代わりに三国志の貂蟬(ちょうせん)を推す人もいるが、貂蟬は架空の人物の可能性が高い。

秋田県象潟の芭蕉の句の「象潟や 雨に西施の ねぶの花」の西施とは、4大美女の西施のことである。王昭君は前漢時代の人で、匈奴と和平を結ぶために宮女の中で皇帝が一番醜い顔で描かれていた彼女を差し出した。実際は絵描きに賄賂を渡さなかった王昭君は絶世の美女で、これを知った皇帝は絵描きを斬首にした。虞美人は漢王朝を建てた劉邦のライバルの項羽の妃だ。また楊貴妃は唐の玄宗皇帝の愛妃で、唐が一時破れる安史の乱を招く原因となった人である。これらの4人は共に中国古代の歴史の転換期に居た人たちのだ。

西施は春秋戦国時代のBC500年弱前、越の勾踐(こうせん)から呉の夫差(ふさ)へ傾国(意:美女)として献上された人で、勾踐の狙い通り彼女的美貌によって呉国を破ることができた。越と呉の攻防での臥薪嘗胆は、越を破るために薪の上に寝た夫差の臥薪と、呉に負けた屈辱を忘れないために苦い胆嚢を舐めた勾踐の嘗胆を合わせた成語である。嘗胆の勾踐は浙江省の人であるが、勾踐の映画を見た時に口ケ地は、浙江省に近い桂林の瀧江ではないかと思われる場面が幾つかあった。



瀧江下り紙幣の山(桂林)

桂林の瀧江には2度旅行をしたが、瀧江下りで見えた奇岩は勾踐の映画でみた景色と同じである。船の中でガイドが突然「写真を撮ってあげる」と言った。場所は中国紙幣に印刷されている、二つこぶラクダのような瀧江の山の前だった(紙幣を持っている写真)。この時に瀧江の山の紙幣を持っていなかったため急遽ガイドから借りた。グズグズしていたらその山を通り過ぎたため、大急ぎで写真を撮ってもらった。

大河の瀧江の流れはゆっくりで、墨絵の中に居るようだった。異空間かと錯覚するような瀧江下りで心身が十分に癒された。船上でゆっくりした時間を楽しんでいたら、竹で組まれた筏が乗船している船にぶつかって来た。「あ、危ない!」と叫んだが、筏の青年は何食わぬ顔で筏を客船

にピッタリ付けて、両手に筏に載せてあった土産物を取るとそれを売り始めた。この危険極まりない行為に「さすが中国だ!」と感心してしまった。ところがこの竹の筏売りだが、2度目に瀧江に旅行をした時には見かけなかった。危険なので規制されたのだろうか?



瀧江の筏売り(桂林)

※台湾の祝日

台湾の事務所から2月28日に顧客との打合せが決まったから出張するようにと連絡が来た。そして台北事務所に前日行ったら、「明日は休みになったから打合せは延期になった」とのこと。「何故急に休みになったの?」と聞き返すと「祝日になったからだ」と聞き、祝日は急に決まるのか?と理解不能になってしまった。何故2月28日が祝日に決まったかを知る台湾人に聞いたら「2月28日は2.28..」、そこまで聞いて直ぐに分かった。日本が敗戦で台湾を放棄した後の1947年(昭和22年)、国民党は中国本土では自由販売のままなのに、税金収入確保のため突然台湾のタバコを専売にして一般市民が自由にタバコを売るのを禁止した。タバコを売って生活していたある婦人が、禁止された後も生活のためにタバコを売っていたら役人が彼女からタバコを取りあげて更に暴行をした。この暴行を見ていた台湾人が市庁舎に集まって抗議をしたが、この時に大勢の本省人(元から住んでいた中国系台湾人)が命を落とした。この事件が2月28日であったので、2.28事件と呼ばれていたのを知っていた。実はこの時に台湾の戒厳令が始まり、40年後の1987年(昭和62年)に解除になった。短い海外出張中に急に予定が変わると実に困るが、一日思わぬ休暇を取れたことと台湾が民主化した表れだから喜ぶべきか?

※台湾花蓮の太魯閣渓谷

台湾の東海岸沿いにある花蓮の太魯閣渓谷に旅行に行った。花蓮には台北の松山空港から飛行機で行き、帰りは台北まで汽車に乗った。

花蓮では台北で予約したタクシーで移動観光をする手はずである。花蓮空港に付いたらそのタクシーが待っていて、運転手は婦人で高崎の自宅の近所のおばさんにそっくりだった。妻と顔を見合わせて吹き出しそうになったのを何とかこらえタクシーに乗った。

太魯閣渓谷は切立った岩肌や深い渓谷で、岩をくり抜いた細いトンネルを幾つか通り抜けて渓谷の上流に行く。その景観は、山梨県の昇仙峡にそっくりだ。温泉があれば石和温泉と昇仙峡の旅行と勘違いそう。

雄大な太魯閣渓谷の自然を十分に満喫した後、花蓮の駅に行く途中のタクシーの車内で、近所のおばさん似の運転手が台湾の果物をくれた。それは蓮霧(レンブ:写真)と言う果物で、見た目は赤いパプリカのようだが、リンゴと梨を



太魯閣(台湾)



蓮霧/レンブ(台湾) りんごと梨の味がする

足して2で割ったような、比較的淡白ですっきりした味だった。こうして日本にはない果物を初めて食べる経験をした花蓮の太魯閣渓谷の旅だった。

※北京で骨董酒器を買う

北京の天安門広場の近くに、巨大な人造湖の北海公園がある。そこの街をブラブラしていたら骨董品屋をたまたま見つけたので中に入った。その店の中に金属でできた酒器があった。その酒器は二重構造になっていて、中側の小さい方の筒に酒を入れ、外側の大きな方に湯を入れて酒が冷めないようにした容器である。このような酒器は現在でも北京のレストランで見かけるが、外観が気に入って、また何やら文字が書いてあったので買求めた。確か200元位で買求めた。当時のレートで3,000円位だったと思う。



酒器



左:酒、右:湯を入れる

酒器の側面に書かれていた文字は七言8行である。8行詩ならば律詩の可能性が高いが、漢詩を研究してきた自分としては理解に苦しむ内容だ。律詩ならば偶数行の最後の字に押韻していなければならぬのに押韻が別の場所にある。また意味も変だ。そうこうしている内に2~3年が過ぎて「ハッ!」と気が付いた。右から縦に読んで左に進むと思い込んでいたが、酒器に書かれていた漢詩は、昔の書き方で左から縦に書かれていたのである。これに気が付いてから意味もすんなり分かったし、押韻も決められた場所にされていることが分かった。更に調べたら、この漢詩は有名な李白の詩であることも分かった。実に良い買い物をしたものだが、酒好きな李白には申し訳ないがまだ酒を入れて飲んだことがない。これで酒を飲めば間違いなく「再来一杯酒(酒をもう一杯ください)」と言うだろう。

鳳凰 吳宮 晋代 三山 二水 總為 長安 酒器の字の横写 (左から読む) 鳳凰の像が無い台を見て) 鳳凰台の上でかつて鳳凰が遊んでいたが、今では鳳凰が去って下の江は悠然と流れている。呉の時代の華やかな宮殿の草花は幽径に埋もれてしまい、また晋の時代の衣冠を付けた高貴な役人も亡くなって古い丘の土と化した。三山に雲がかかって上半分が見えず、半分から下が青天から落ちて来たかのようだ。また白鷺の洲を中であぐらで水は二つに分かれて流れている。浮雲が太陽をも遮っているために、長安が見えず人を愁いさせる。

○詩の意味 訳:王子雲 (鳳凰の像が無い台を見て) 鳳凰台の上でかつて鳳凰が遊んでいたが、今では鳳凰が去って下の江は悠然と流れている。呉の時代の華やかな宮殿の草花は幽径に埋もれてしまい、また晋の時代の衣冠を付けた高貴な役人も亡くなって古い丘の土と化した。三山に雲がかかって上半分が見えず、半分から下が青天から落ちて来たかのようだ。また白鷺の洲を中であぐらで水は二つに分かれて流れている。浮雲が太陽をも遮っているために、長安が見えず人を愁いさせる。

※2001年9月11日の台湾

この日は台湾出張の最後の日で、夕食では台湾事務所の人と「乾杯・乾杯、再来一杯啤酒(ビールをもう一杯ください)」等と言い懇親を終えた。帰国は明朝なので早めにホテルに帰り、早々にベッドに入り眠った。夜中に目が覚めて付け置きにしていたテレビに、ビルに衝突した飛行機が映っていた。「ドラマ? 軽飛行機がビルに衝突する場面だな」と

思いました眠りについた。

今回は午前中の早い便にしたため、目覚めてから急いで朝食を食べた。台湾桃園国際空港に向かった。空港内はいつもののに比べて随分空いていて、「今日はラッキーな日だ!」と心の中で叫び搭乗手続きをした。飛行機の中でも、普段よりも乗客が少なく空いていた。空港や飛行機の中が混んでいると落ち着きが無くうざりだが、「本当に今日はラッキーだな!」と思った。3時間半のフライトで成田に到着して、そのまま高崎の自宅に帰ってびっくりした。昨夜台北のホテルで、寝ぼけまなこで観た飛行機がビルに衝突する映像はドラマではなく、また軽飛行機でもなくジャンボ機で全米同時テロの映像だった。翌日に会社に行ったら、「どうして帰って来たのか?」と聞かれて「え?..」と疑問に思った。テロがあった時、海外出張者は全員そのまま待機する命令が出ていたらしい。どうりで空港と飛行機の機内が空いていた訳だ。私は早朝に出発したので、待機命令が届かなかったのである。空港と飛行機の中が空いていて「ラッキー」と思ったのは、大きな間違いだったのが帰国後分かった。

※台湾北部の海岸の旅行

台北で車をチャーターして、妻と台湾の北海岸をぐるりと一周する旅行をした。基隆(台北の北側の街)では、高崎市にある白衣観音とそっくりなやや小柄な観音像があった。夏だったためと思うが、市中には孟蘭盆(うらぼん)の旗が目についた。また漁港の市場で魚と貝を買って、青空レストランで料理してもらって、大変に美味しい昼食を食べた。

昼食後は野柳(地名)の金宝山墓園に案内された。ここはテレサテンの墓がある。テレサテンの墓近くに大きな石造りの建物があって「喫茶店かな?」と思ったが、運転手によると金持ちの墓だそう。日本の墓とは比べ物にならない大きさで圧倒される。その中でテレサテンの墓は小さい方だがそれでも目測で20~30坪程だ。墓前に入ると自動的にテレサテンの曲が流れて来た。急に音楽が鳴ったため驚きながら妻とテレサテンの冥福を祈った。その後次の目的地の淡水に向かった。

中国が明から清に王朝が変わる狭間の時に、清に破れた明の将軍、鄭成功(ていせいこう)がオランダの支配地であった淡水を1661年に破って台湾に入った。当時のオランダの城が今でも残っていて紅毛城と言う。淡水の紅毛城及び雄大な河口と海を見つめてしばしばリラックスした。

淡水の後、台北市に近い関渡のお寺を見た。お盆に近かったためか、近所の村々から御供え品が山と積まれていた。その中に屠殺(とさつ)された豚と数羽の鶏があった。日本人の感覚としては、お寺の御供え品としては如何なものかと思ってしまう。この寺の後ろは丘になっており、そこを登ると見事な柱の透かし彫りの工房があった。運転手兼ガイドによると、透かし彫りの学校だそう。その透かし彫りは花や小鳥が浮き彫りに彫刻されていて、実に素晴らしい芸術品だった。

関渡のお寺を見た後は一路台北のホテルに帰ったが、一日掛かりの台湾北海岸一周旅行であった。

追記) 李白は大変に酒好きだったらしい。李白が死んだ原因は、酔って船から転落し水死したと言われている。

◆ 記事 嵯峨 良平(昭和43年電気科卒)

Advertisement for Arcadia Market (アルカディア市ヶ谷). It features a photo of people clinking glasses and text in Japanese and English. The text includes: "乾杯!"からはじまる感動のひととき。BANQUET / ACCOMMODATION / RESTAURANT 宴会・会議/宿 泊/レストラン。アルカディア市ヶ谷 SH私学会館。https://www.arcadia-jp.org 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25 宴会予約直通 03-6685-0540 宿泊予約直通 03-6685-0541 JR線・地下鉄(有楽町・新宿・南北線) 市ヶ谷駅 徒歩2分

Advertisement for YKC (リフォームのワイケー). It features a photo of a house under renovation and text in Japanese. The text includes: リフォームのワイケー 塗装&リフォーム 代表 大澤 隆夫 昭和42年機械科卒 〒198-0036 東京都青梅市河辺町1-813-7 東京都青梅市河辺町4-11-12 TEL. 0428-21-5102 FAX. 0428-27-1409 携帯. 090-6473-1846 なによりも本物を